

## ◆ 巻頭言

## 集めることの意味

## 内藤 和美

まもなく、公益財団法人日本女性学習財団の資料室が開室する。資料室には、財団がこれまで作成・提供してきた、女性の学習・教育、家庭教育・次世代育成関係の資料が展示・保存される。各資料は、時代の学習・情報ニーズを反映したそれぞれの意義をもつが、資料が集められまとめられることは、そうした個別資料の意義とは別の、集められることによる価値を生む。

資料のみならず、集めることの意味、集めてこそできることにあらためて目を向けたい。女性／男女共同参画センターしかり、男女共同参画計画しかりである。女性／男女共同参画センターの本領は、性別に関する平等・公正に係る活動、学習、情報、相談、調査研究、創作表現等その個々の機能もさることながら、これらの機能が1ヵ所に集まって「拠点施設」を成していることにある。1ヵ所に集めることは、事業どうし、活動・機能どうし、人どうし、情報どうしが接し、響きあい、結びつくチャンスを生む。施設の機能に接して生じた個別の小さな変化は、響きあい結びつくことで、不可逆的な広がりのある変化に変わり得る、作用しあってそこから新たなものが生まれ得る — 1つにまとめることで変化の共鳴装置となること、拠点施設をつくる意味はそこにある。

同様に、男女共同参画計画は、性別に関する社会的公正さの増大に役立ち得る事業・対策が個々別々に行われるのではなく、関連づけられ順序づけられ、総力戦で成果を上げるよう組立てたものである。だから、計画をつくっておきながら、各事業を個別に実施し、その結果を個別に検証するだけでは、計画をつくった意味がない。

折しも私は、知の集積にやや不利な面のある日本の女性学／ジェンダー研究の、博士論文のデータベースを8月1日に公開したところだ (<http://wsgs-db.jp/search/>)。集めることで活用されやすくなる。

ことほどきように…歴史的記録、文化資産の保存継承、資料相互の対照・重ねあわせによる利用可能性の広がり等々、70年の歴史をもつこの財団の資料室に資料が集められることが生み出す新たな価値に期待したい。



## PROFILE

内藤 和美  
(ないとう かすみ)

お茶の水女子大学他非常勤講師。(公財)日本女性学習財団評議員、日本社会教育学会常任理事。専門は、ジェンダー関連政策・行政、特に女性関連施設。著書『ケア その思想と実践② ケアすること』(共著)岩波書店 2008年、論文「女性関連施設事業系熟練職員の実践の分析—発揮されている能力とその相互関係」『女性学』17号 pp.92-113 2010年、ほか多数。